昭和女子大学教職課程研究報

EduMate vol. 4

【特集】
これまでの教育／これからの教育
（道徳教育／公民科教育）

教育の最新事情
ブラック校則と不登校

専任が語る
英語教育をめぐる雑感
「謎のベストセラー」、教科書を問い直す
七夕読書会をめぐる冒険

學校探訪
私立 山脇学園中学校・高等学校

P3
先達から学ぶ
【特集】これまでの教育／これからの教育
これまでの道徳教育／これからの道徳教育
これまでの公民科教育／これからの公民科教育

P9
教育の最新事情
ブラック校則と不登校

P12
専任が語る
学校の英語教育をめぐる雑感
「謎のベストセラー」、教科書を問い直す
「七夕読書会をめぐる冒険～一通の手紙から～」

P18
學校探訪
私立 山脇学園中学校・高等学校

P21
イマドキ学生に聞きました
今回のテーマ
『教育実習でうれしかったこと』

P22
先輩はもがく、されど進む
平成三十年度卒のみなさん

【特集】

これまでの道徳教育／これからの道徳教育

人間の本質は何か。他の動物の社会と比べて歴然なのは、文化をもち発展させていることです。どうしてそのことができるのでしょう。よりよいものを求めて、感じたり、考えたり、表現したりできるからです。つまり、価値志向の生き方ができることです。その根底にあるのが道徳的価値意識です。人間として成長し、よりよい社会を創っていくためには、道徳的価値の育成が不可欠です。学校教育において、道徳教育は、根幹に位置づくものです。その道徳教育が、現在、「特別の教科 道徳」が設置され、抜本的改善・充実が図られています。それは、これから取り組まれる新教育課程をリードするものと考えられます。道徳教育充実の目的を一言で言えば、「特別の教科 道徳」を要に学校を真の人間教育の場にするということです。そのことを具体的に見ていきましょう。

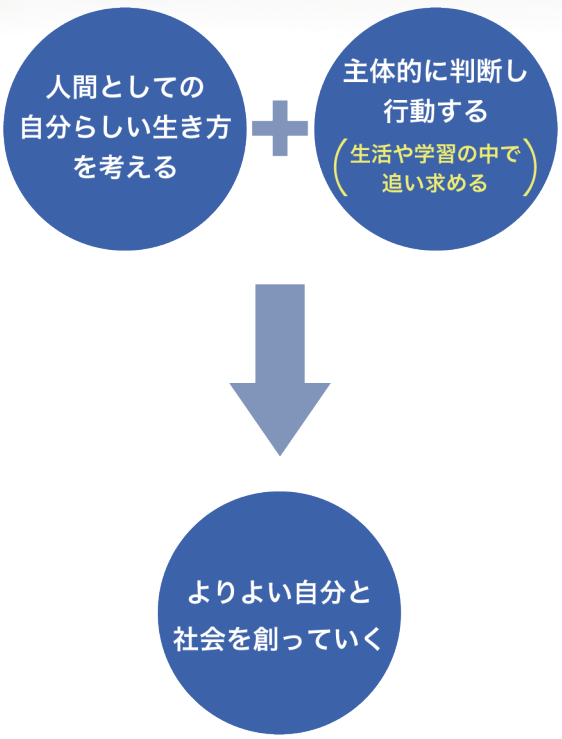
1　道徳教育は自ら進んで道徳的実践のできる子どもを育てること

学校の道徳教育は、「自己の生き方（人間としての生き方）を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した人間として他者とともによりよく生きるための基盤となる道徳性を養うこと」（カッコ内は中学校）と学習指導要領に記されています。

この目標には、目指すべき子どもの姿が示されています。ポイントが二つあります。まず、「人間としての自分らしい生き方をしっかり考えられる」子どもです。この世に生まれてきた以上、だれもがかけがえのない生命をもっています。その生命をしっかりと生きていくことこそ、すべての子どもたちに課せられた課題です。

二つ目のポイントは、人間としての自分らしい生き方を追い求めて、日常生活や様々な学習活動、これからの自らの人生において、「主体的に判断し行動できる」子どもです。道徳教育は、人間としての自分らしい生き方を考えるだけでは十分ではありません。そのことを実際に追い求めて、自分を成長させ、みんなと一緒によりよい社会を築いていける子どもたちを育てるのです。そうでなければ、よりよい自分もよりよい社会も存在しません。

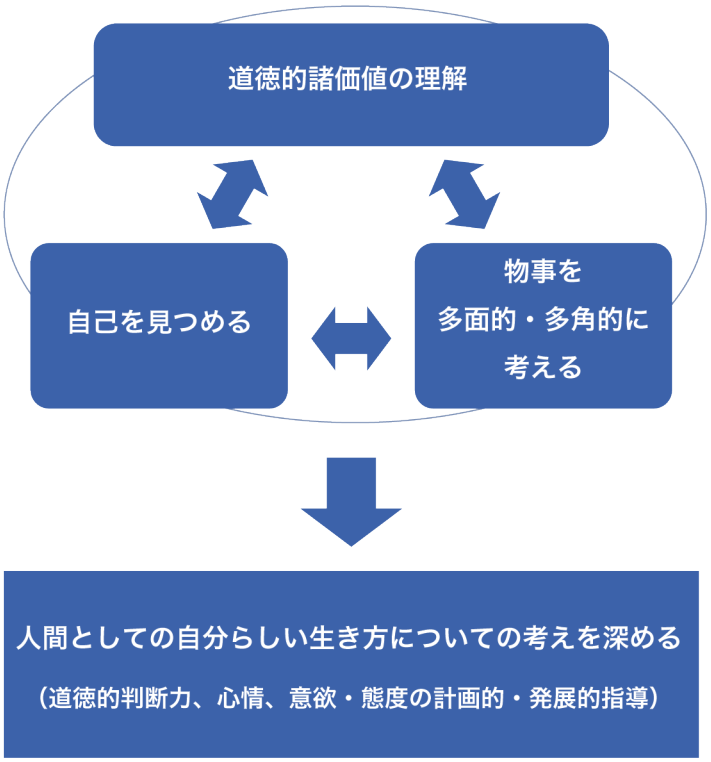
しかし、それは容易ではありません。だからこそ、教師が一丸となって、家庭や地域とも連携して道徳教育に取り組む必要があります。子どもたちはいろんな所で、悩み、葛藤し、チャレンジしながら成長していきます。そのことを通して自立した人間になっていきます。そういう子どもたちが一緒になってよりよい社会を創っていきます。そのトレーニングをする場が学校です。



2 「特別の教科 道徳」で何を育てるのか

「特別の教科 道徳」の目標は、「よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を（広い視野から）多面的・多角的に考え、自己の生き方（人間としての生き方）についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる」（カッコは中学校）となっています。

道徳の授業においては、三つのキーワードで示すことができます。一つは「道徳的諸価値の理解」。一つは「自己を見つめる」。もう一つは「物事を多面的・多角的に考える」です。この三つのキーワードは別々にあるのではなく、すべて関わらせて指導していく必要があります。そのことを通して、「人間としての自分らしい生き方についての考えを深める」学習が保証されなければならないことが記されています。



「道徳的価値の理解」は、基本的には道徳の指導内容に示されている道徳的価値について理解することです。それは、自分を見つめる判断基準、あるいはいろいろな状況の中でどうすればよいかを考える判断基準になります。「自己を見つめる」とは、人間としての自分らしい生き方という視点から、今の自分、今までの自分、これからの自分をとらえなおしていくこと。さらに、いろいろな状況の中で自分はどうすればよいのかを考えていくことです。「物事を多面的・多角的に考える」というのは、いろいろな道徳的な事象や道徳的な状況の中で、どのように対応することが、人間としての自分らしい生き方になるのかを様々なことを考慮しながら考えることです。

そして、それらの学びを通して「人間としての自分らしい生き方についての考えが深め」られるようにするのです。その中で、道徳性の諸様相の中核となる、道徳的判断力、道徳的心情、道徳的意欲や態度を計画的・発展的に育んでいき、日常生活や様々な教育活動で「主体的に判断し行動」できるようにしていくのです。

3 道徳の評価は一人一人の「よいところ探し」

このような「特別の教科 道徳」の評価は、従来の評価観を180度転換させるものです。今までの評価は、様々な要素が考慮されますが、教師が指導したことをいかに身につけたかを中心になされます。「特別の教科 道徳」の評価も、様々な要素が考慮されますが、基本的には、子どもたちが本来もっているよりよく生きようとする心（道徳心）をいかに目覚めさせ、引き出し、成長させているかを評価するのです。その実態は一人一人において様々です。それぞれの実態に応じて、自分自身のよりよく生きようとする心（道徳心）と向き合い、考えたり、感じ取ったり、意欲づけられたりしている状況を評価します。一言で言えば、一人一人のよりよく生きようとする心（道徳心）に関する「よいところ探し」が、「特別の教科 道徳」の評価です。

そのような評価は、一人一人の子どもたちをかけがえのない存在として認識し、よりよく生きていくことを信頼し、一人一人をリスペクト（敬う）することを前提として行われます。つまり、「特別の教科 道徳」の評価は、一人一人への愛情表現であ

り、子どもたちが生涯にわたってよりよく生きていくための支えとなるプレゼントなのです。

4 「特別の教科 道徳」の授業における課題

では、「特別の教科 道徳」の授業をどう構想していけばよいのでしょうか。ここでは、「特別の教科 道徳」の特質を生かした授業を構想するということで、一見両立が難しいと思える2つの本質的な課題を、いかに両立あるいは統合していくかという側面から、特に次の7つのポイントについて考えてみます。

第一は、「誰もが理解できる」ということと「ねらいに関わって考えを深める」ことをどう両立させるかです。その対応として、「誰もがこたえられる問いかけ」をベースとしながら、「ねらいに関わって考えを深める問いかけ」を取り入れていくことが考えられます。「誰もがこたえられる問いかけ」をベースにすることによって、「ねらいに関わって考えを深める問いかけ」にも興味を示し、考えを発表し思考を深める子どもたちに刺激されて自分の考えを深めていくことができます。そして、意外と思える子どもたちが発表してくれるようになります。そのような意見こそが授業を深めてくれます。

第二は、「授業のねらい」と「子どもたちの関心」との両立です。これは両立というより統合させていく必要があります。その対応としては、教材分析において、副価値を明確にし、主価値と副価値とをどのように関わらせながら授業を展開できるかを考えていきます。そうすると、子どもたちからの意見にゆとりを持って対応できますし、主価値の理解も深まりますし、自分を見つめることも実際の生活と関わらせてより深めることができます。

第三は、「個人の思考」と「集団の思考」をいかに両立させるかです。その対応としては、「個人で考える」場と「集団で考える」場をうまく取り入れていくことです。特にグループでの話し合いを通して「個人の思考」と「集団の思考」を高めることができます。グループでの話し合いを様々に工夫することによって、アクティブラーニングが促進されます。より効果的にするには、日常的な活動や教育活動で、グループでの活動や話し合いを様々に取り入れ、訓練する必要があります。

第四は、「道徳的価値の追究」と「自分を見つめる」ことの両立です。その対応としては、特に、教材の世界（状況）に入り込み、内容や登場人物を共感的に捉えるようにすることです。教材の内容や登場人物に共感しながら、ねらいに関わる中心発問において出てきた意見を、うまく整理することで、自分を見つめる観点が明確になります。そのことによって新しい発見や、大切にしなければならないことの確認や、これからの自分の課題などについて深く考えられるようになります。

第五は、「沈思黙考する」ことと「体験を通して実感する」ことの両立です。その対応としては、考えることと実感することをつなげることです。共感しつつ考える、考えて課題を見出して体験的な活動を通して考えを深める。体験活動を通して感じたことを深く考える。授業後に実感できるようにする、などが考えられます。

第六は、「客観的に考える（感じ取る）」ことと「主観的に考える（感じ取る）」ことの統合（融合）です。その対応としては、特に、問いかけの工夫が求められます。「あなただったらどう思うか」「あなただったらどう考えるか」「あなただったらどうするか」といった問いかけです。しかし、この問いかけは、教材の状況と関わらせて行う必要があります。教材の世界と自分の世界を交流させるのです。そうでないと教材を通しての道徳的価値の自覚が深まりません。「あなただったら」と問いかけた後で、この主人公はどうしてこのような行動をとったのだろう等と、教材に返っていくのです。

第七は、「授業での学び」と「授業後の学び」の統合です。その対応としては、特に、「道徳ノート」の活用が求められます。「道徳ノート」は授業のみで使うのでなく、授業後に気付いたことや考えたこと、取り組んだことなども記入できるようにしていくのです。ある学校では、金曜日の朝の時間に、今週の道徳の授業で学んだことに関して、日常生活や様々な学習活動の中で気づいたことや考えたこと、取り組んだことなどを「道徳ノート」に記入するようにしています。授業で使った教材や、毎回の授業で考えたことや教材名を順に教室に掲示していき、日常生活において意識できるように働きかけていくことなども考えられます。

これらに留意し、子どもたちと一緒に道徳の授業を楽しみましょう。

◇押谷　由夫（武庫川女子大学大学院　教授、昭和女子大学　名誉教授）

【特集】

これまでの公民科教育／これからの公民科教育

学生・生徒のみなさんとの出会いから

2008年度から、非常勤講師として「公民科教育法」を担当させていただいています。これまで、12年間で延べ100名以上の受講生に出会い、公民教育について意見交換したり、少人数で模擬授業をじっくり検討し合ってきました。毎週土曜日の出講が楽しみで、学生のみなさん以上に、自分自身が多くのことを学んできたように感じています。

筆者の本務は、高校の現役の公民科教員です。月曜～金曜は、高校生に授業をしています。これまで、普通科のほか、専門学科や夜間定時制などにも勤務し、出会った生徒は1500名以上にもなります。

こうした学生・生徒のみなさんとの出会いこそ、自分にとってかけがえのない財産です。そこで本欄では、これまでの印象深い出会いと、そこで交わされた言葉を手掛かりに、公民科教育を問い直してみたいと思います。振り返れば、自分が公民科教育のあり方を考えるきっかけは、授業中のふとしたできごとや、学生・生徒のみなさんとの何気ない会話であることが多かったと感じます。「現場に神宿る」ではないですが、これまでの出会いを振り返りながら、公民科教育について考えてみたいと思います。

あなたが受けた公民科授業は？

新年度の第1回の「公民科教育法」は、高校時代に自分が受けた公民科授業を振り返るところから始めています。最近の回答に、次のようなものがありました。

「『政治・経済』では、毎回、ニュースで話題になることを生徒が中心となって討論しました。自分もそういう授業ができるようになりたくて、公民科教師を目指しました」

自分で調べて発表して、クラスのみんなで議論する授業を、ときどきではなく「毎回」受けていたというから驚きです。担当の先生は、発表に向けて事前にアドバイスをくれたり、当日は関連する知識を補ったり、議論の論点整理をしてくれたとのことでした。戦後、社会科には「時事問題」という科目が設置され、高校生が新しい日本の未来について大いに議論しました。この授業はその姿をほうふつとさせるとともに、今度の新学習指導要領が目指す「課題追究学習」の先取りという印象も受けます。

自分が着任して以来、学生のみなさんが受けた授業というと、「教科書を読んでプリントの穴埋めをするだけだった」「覚えることが多く、ひたすら暗記していた」など、「知識つめ込み型」がほとんどでした。先生の口癖やしぐさばかりが印象に残って、中身は何も記憶がないという声や、公民科の3科目のうちどの科目を履修したかさえ覚えていないという声もありました。

変化が見え始めたのはごく最近です。「各国代表に扮して模擬国連をやった」「パソコンを使った投資ゲームが楽しかった」などの声が、少しずつ聞かれ始めました。彼女たちの高校時代は5～6年前ですから、ちょうど新しい学習指導要領の改訂の方向性が示され、「アクティブラーニング」がうたわれ始めた時期です。公民科では、新科目「公共」の内容が明らかになり始めた頃になります。これから本格的に新教育課程が施行され、大学入試改革も実を結べば、こうした授業がますます増えることでしょう。知識つめ込み型の経験者が少数派になる日も、遠くないかもしれません。

しかし、不安もあります。先日、高校時代に「模擬選挙」をやったこ

とがある学生のみなさんに、それによって政治への関心が高まったか、選挙やその他の行動に参加するようになったかと聞いたところ、全員が「わからない」と答えました。模擬選挙と投票率を安易に結びつけるのは禁物ですが、模擬選挙は「ごっこにすぎない」という批判もあり、「体験あって学びなし」とは昔から言います。今度こそだいじょうぶか、改めて問い直したいところです。

「体験は誰でもできるが、それと経験の深まりは別」といいます。つめ込みではなく、いつでも正確に言葉や文章にして発表できる知識こそ、考えを深めるためには必要とも言われます。知識と経験、この二つをどう両立させるかが、これまでも、そしてこれからも、公民科授業の課題であり続けるように思います。

生徒を受け止める

以前、高校の授業でこんなことがありました。1年生の授業でレポートを返却したところ、ある男子生徒がひどく興奮して「先生ありがとう。オレこんなふうに書かれたのは初めてだ。本当にありがとう」としきりに感激しているのです。見ればその生徒は、レポートの課題に一言「あまり考えたことがありません」としか書いていませんでした。それに対して、自分は赤ペンで「少し難しかったかもしれない。今日の授業で何人かに発表してもらうから、みんなの意見を聞いて、引き続き考えてみよう」と書き添えていました。特に感激するようなコメントでもないと思いますが、なぜそんなに喜ぶのでしょう。

あとで聞いたところ、その生徒は文章を書くのが大の苦手で、中学校ではいつも、レポートは「もう少し」や「再提出」とスタンプを押されて返されていたのだそうです。高校でもてっきり再提出だと思っていたところ、意外にも自分の書いたこと（書けないこと）に向き合ってもらえて、それがうれしかった、ということでした。

何気ないできことですが、ここには、社会科・公民科の授業で大切なことが潜んでいるように思います。それは「生徒を受け止める」ということです。

話が少し大げさになりますが、社会科・公民科の授業は、個人の尊厳、法の下の平等、表現の自由など、人々に当然に認められ、日本国憲法でもうたわれている基本的人権を、教科の直接の内容とします。だからこそ、授業においては、生徒一人ひとりが平等に尊重され、その存在が認められ、思ったことを自由に表現することが認められなくてはなりません。しかし、実際は、課題ができていないと、教師は生徒を「態度不良」「やる気がない」とみなし、そのような言葉を生徒に掛けてしまいがちです。

「公民科教育法」で、学生のみなさんにこのことを聞いてみました。彼女たちは「公民の先生なのに部活の子ばかりひいきしていた」とか、「先生に『そんなことも知らないの』と言われ傷ついた」とか、逆に「倫理の先生は誰に対しても優しく接してくれた」など、教師とのさまざまなやりとりを、実によく覚えていました。教師の影響力の大きさを改めて思い知らされました。

「考えたことがない」としか書いていないレポートでは、評価が難しいのは確かです。しかし、教師が生徒に掛ける言葉一つ、しぐさ一つがマイナスに作用してしまえば、そこに生徒は「自分は先生に認められていない」と見て、それが学びに影響してしまいます。逆に、その記述をひとまず受け止めて「引き続き考えよう」とすれば、生徒はより前向きになれます。最近の若者に欠けていると言われる「自己肯定感」の向上にもつながるかもしれません。特に公民科には、いろいろな生徒を受け止める役割があるように思います。この生徒の感激ぶりから、そのことを改めて肝に銘じました。

女性こそ公民科教師に

「これまで教わった社会科や公民科の先生はみな男性でした。女性でもなれますか？」「公民科教育法」の授業で学生さんからにこんな質問をされて、はっとしたことがあります。確かに自分の生徒時代を振り返っても、中学と高校の社会・地歴・公民の先生は、全員男性でした。のちに教員になり、公民科関係の学会や研究会に参加すると、会場が全員男性ということも珍しくありません。２０１８年度の東京の公立高校を対象にした調査では、教科別担当教員の女性割合は、主要教科では公民が18・2％で数学（17・7％）についで低く、情報（19・7％）、地理歴史（20・5％）と続きます（表）。逆に女性の割合が高い教科は、同じ文系でも外国語（53・9％）、国語（55・1％）と半数をこえています

し、芸術は63・6％、家庭科はなんと96・6％です。全教科平均の女性の割合は約37％ですから、公民科がいかに「男性偏重」かがわかります。「女性はなれないのか」と学生のみなさんが疑うのも無理はありません。

自分は、だいたい次のように回答しました。「もちろんなれます！確かに男性が多いですが、自分はこれまで、女性の社会科の同僚から多くのことを教わりました。ジェンダー、男女平等、女性の参政権、労働問題……女性に関わるテーマを直接扱う公民科の教師こそ、女性にふさわしいと思います。男性にはできない視点の授業づくりも、きっとできるはずです。自分もそうした授業から学びたいと思っています。ぜひ目指してください」

例えば、政治参加の重要性を語るにしても、女性の先生が、かつて世界や日本で、女性たちが命がけで参政権獲得を目指した歴史を伝えれば、そこには男性教師には出せない重みがあるはずです。働く女性についても公民科の内容ですが、先生自身が女性ならば、それこそ「生きた教科書」です。自分は男性ですが、そうした女性たちを積極的に応援したいと思いますし、昭和女子大学の公民科教育法で学んだみなさんには、ぜひそうした公民科授業を担う教員になってほしいと思います。

	社会	公民				地理歴史				全教科
	（地歴＋公民）		現代社会	倫理	政治・経済		日本史	世界史	地理	合計
計	893	236	76	48	112	657	268	245	144	7837
男	715	193	60	40	93	522	219	183	120	4623
女	178	43	16	8	19	135	49	62	24	2764
女性割合	19.9%	18.2%	21.1%	16.7%	17.0%	20.5%	18.3%	25.3%	16.7%	37.4%

表：2018（平成 30）年度　東京都公立高等学校の一般教諭の教科別内訳
（東京都教育庁『平成 30 年度　公立学校統計調査報告書【学校調査編】』（第 28 表）より作成）*1

平和で民主的な社会をつくる

これまでに出会った学生・生徒のみなさんの印象深い言葉を手掛かりに、公民科教育のこれまでを振り返り、これからを考えてみました。最後に、「公民科教育法」の期末試験の答案にあった、次のような言葉を紹介します。「公民科は日本史や世界史に比べて影が薄く、受験科目でもないので、正直あまり必要ないのではと考えていました。しかし、学べば学ぶほど、この教科が私たちの社会の土台を支える大切な教科であることがわかりました。政治や経済の基本的な知識を学ぶことはもちろんですが、それを担っているのは私たち一人ひとりであること、人任せにするのではなく、私たち一人ひとりがそれを担っていかなければいけないこと、その意識を学ぶことがとても大切だと思いました」

この答案には、「平和で民主的な社会の担い手をつくる」という公民科の目標がよく表れています。これから教育課程が変わり、科目構成や内容が変化しても、この大目標は、これまでも、そしてこれからも変わらないところです。自分自身も高校の現場で、こうした教育を担う一員であり続けたいと思うとともに、本学の「公民科教育法」から、志を同じくする「未来の同僚」を、一人でも多く育てていきたいと考えています。

【註】
*1 指導主事、派遣・留学等、休職者、妊娠出産休暇補助、育児休業補助及び引継教員等を除く。

【参考文献】
小針誠『アクティブラーニング』講談社現代新書、2018
新藤宗幸『主権者教育を問う』岩波ブックレット、2016
森有正『思索と経験をめぐって』講談社、1976
樋渡直哉『平凡な自由　私の体験的教育論』大月書店、1992
升野伸子・國分麻里・金玹辰編『女性の視点でつくる社会科授業』学文社、2018

◇渥美　利文（昭和女子大学 総合教育センター 非常勤講師）

教育の最新事情

ブラック校則と不登校

皆さんは、「ブラック校則」という言葉を知っているでしょうか。「ブラック校則」については、はっきりとした定義が決まっているわけでありませんが、「不合理で不適切な校則」のことをそう呼ぶことが多いです。2017年に大阪府立高校の高校生が地毛を黒染めされるように学校から強制されたことにより、精神的な苦痛を受けたとして裁判を起こすという事件がありましたが、この事件をきっかけに「ブラック校則」という言葉が一般的になったと言われています。

もしかすると、今年はSexy Zoneの佐藤勝利さん主演で同名のドラマと映画が放送・公開されましたから、耳にしたことがある人も多いかもしれませんね。非常に楽しみなのですが、ドラマは2019年10月14日から放送、映画は11月に公開になるということなので、残念ながら、この原稿の執筆段階（2019年9月27日）の私はどちらも見ることはできません。なので、内容については、知る由もないのですが、ドラマと映画の公式サイトには、キャッチコピーとして、「本当の自由を手に入れるために！　僕らは戦う。何と。ブラックな校則と。恋するあの子を救うために！」といった文言が書かれています。私は、ここに書かれている「自由」「戦う」といったキーワードこそが、「ブラック校則」の輪郭をよく捉えているように思います。

意外に思われるかもしれませんが、日本の学校でも1990年ころまでは、「男子は坊主！　女子は三つ編み！」といった、いわゆる「不合理で不適切な」校則がある学校が一般的でした。しかし、このような校則があることは人権侵害なのではないかという声が多くあがり、人々の共感を呼びます。その共感が全国に波及し、今ではこういった校則がある学校はかなりの少数になったというわけです。

つまり、私たちには、「不合理で不適切な校則」と「戦う」ことによって、ある程度の「自由」を手に入れてきたという歴史があるのです。

では、現在の多くの学校では、完全に髪型が自由化されたといえるのでしょうか。もちろん、そうした先駆的な学校がいくつかあることは否定しませんが、多くの学校では、髪型が完全に自由化されているとはいえないのが現状なのではないかと思います。当然、「男子は坊主！」「女子は三つ編み！」ということが校則にきっちり織り込まれていたかつての時代と比べれば、だいぶ自由度は増したことでしょう。しかし、今でも多くの学校では、頭髪の長さの制限や色が決められているのが一般的です。これは、本当に「合理的な」校則なのかということで、今現在も議論が繰り広げられています。

このように考えていくと、「ブラック校則」を是正していくためには、まずは全員が校則やルールに対して、「おかしい」と感じること、このことが改善の第一歩になるように思えます。今はドラマや映画の影響もあり、まさにその機運が高まっている時代だといえるでしょう。

今年NHKがLINEを通じて中学生1万8000人を対象に行った調査によれば、不登校の子どものうち、21%ほどが「決まりや校則になじめない」ことを理由にして、学校に行かなくなったという回答をしています。学校に行かないという選択をすることは、非常に勇気がいることです。学校に行くのが当たり前だとされている現在の日本では、学校に行かないことで、周りから白い目で見られてしまったり、学校の行って

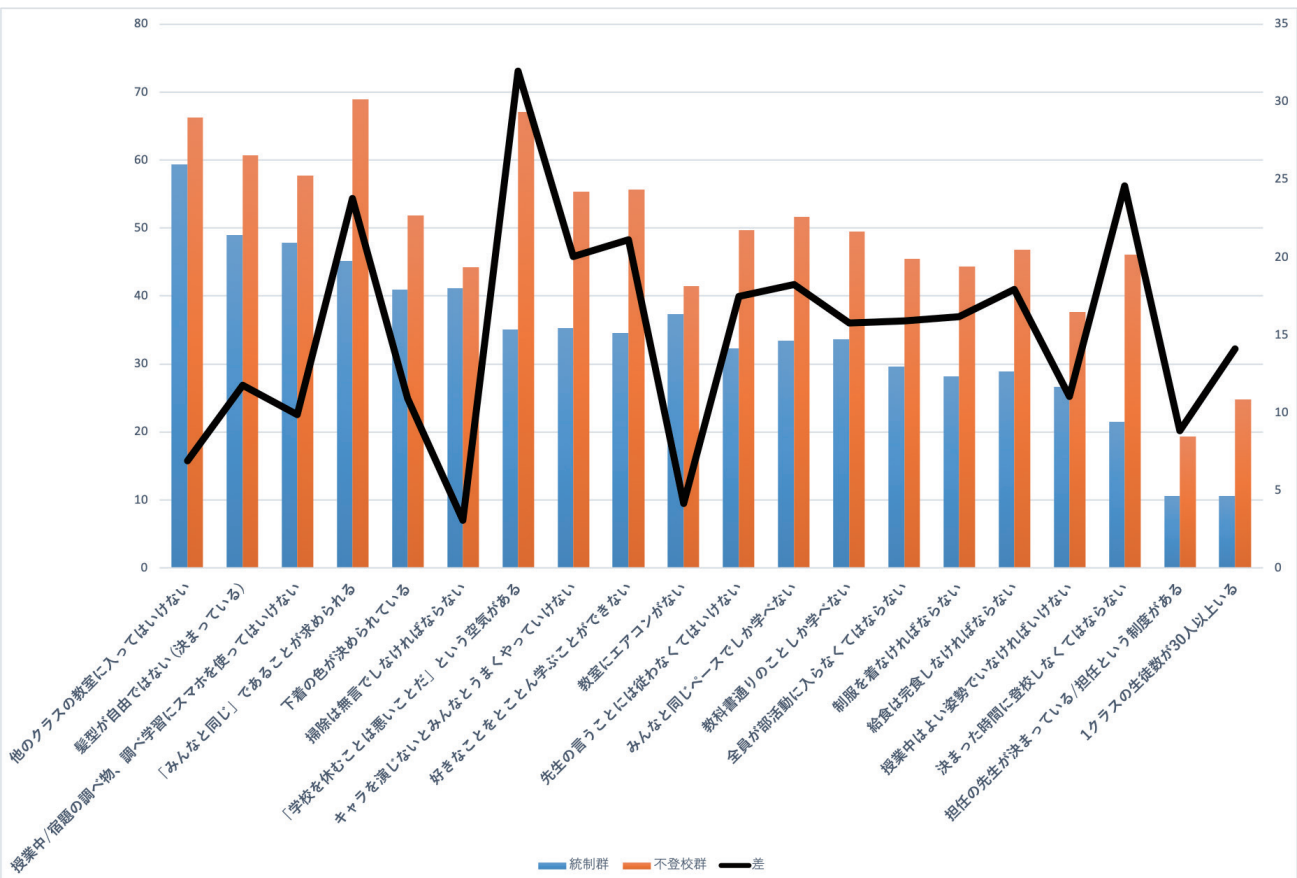
いる子どもよりも将来不安が大きかったりすることがこれまでの研究でも明らかにされています。そうした選択をする中学生やそうした選択をせざるを得なかった中学生のためにも、「不合理で不合理な校則」に対しては、私たちを含む全員が違和感を持たなければ、自由を手に入れることはできないのです。

では、現在の中学生は、どのような校則やルールに違和感を持っているのでしょうか。先のＮＨＫが実施した調査の結果を一部見てみましょう。そこから、私たちがなぜ「ブラック校則」を受け入れてしまうのかを少しだけ考えてみたいと思います。

図に示したのは、どのような中学生がどんな校則をおかしいと思っているかを示したグラフです。質問文は「次にあげるものは『日本の中学校によくある決まり／ルールや状況』です。この中で「おかしい／変だ／自分の学校ではやめてほしい」と思うことをすべてお選びください」という尋ね方をしています。挙げられているのは、先の例に挙げた髪型に関するものや無言清掃（掃除をするときには、無言で行わなければならない）など「よくありそうな」20の校則やルールでそれらの項目に対して「おかしい／変だ／自分の学校ではやめてほしい」と感じたものを好きなだけ回答してもらうということになっています。自分の学校にそうした校則があるかどうかは問わずに回答してもらっているというには注意が必要です。

青い棒で示したのが、「統制群」といって、特別な理由がない以上、毎日学校に通っている中学生で、赤い棒で示したのが過去1年間で「不登校」だった中学生（「不登校群」）です。ほかにも、「仮面登校群」「不登校傾向群」という分類も作ってあるのですが、わかりやすく比較するために、「統制群」と「不登校群」だけを抜き出して比較しています。そして、折れ線グラフで示したのが、「統制群」と「不登校群」の回答のポイント差です。この数字が大きければ大きいほど、学校の「決まり／ルールや状況」への違和感が「統制群」と「不登校群」で大きく異なるというわけです。

まずわかるのは、「統制群」はもちろん、学校に大きな違和感を持っているとされる「不登校群」ですら、ほとんどの校則やルールには違和感を持っていないということです。「統制群」で最も違和感を持っている校



図：学校の「決まり／ルールや状況」へ違和感を持っている割合

則は「他のクラスの教室に入ってはいけない」というものなのですが、この校則ですら6割弱の中学生しか違和感を持っていません。他の19個の校則やルールは過半数以上の中学生が受け入れているし、違和感すら持っていないのです。個人的に驚いたのは、「ブラック校則」の代表格ともいえる「下着の色が決められている」ことや「掃除は無言でしなければいけない」（いわゆる無言清掃）、「給食を完食しなければならない」といった校則を大多数の中学生が違和感を持たずに受け入れているという事実です。これでは、一部の人たちがどれだけ騒ごうと、校則を変えようという動きにはつながっていかないかもしれませんね。

では、「不登校群」の結果はどうでしょうか。「不登校群」については、どんな校則やルールであっても、「統制群」よりも大きく違和感を持っているという特徴があるのですが、その中でも、「統制群」と「不登校群」で違和感に大きな差がある項目は、「『みんなと同じ』であることが求められる」や「好きなことをとことん学ぶことができない」、「みんなと同じペースでしか学べない」といったものであることが見て取れます。もちろん、最も差があるのは、「『学校を休むことは悪いことだ』という空気がある」ことや「決まった時間に登校しなければならない」という項目なのですが、学校に行くことそのものを問う項目は、「統制群」と「不登校群」で差が出て当然なので、除いて考えています。

逆に差が少ないのは、「掃除は無言でしなければならない」や「教室にエアコンがない」「他の教室に入ってはいけない」などの校則、ルールです。学校を卒業してだいぶ経つ私にとってはどこも結構違和感があるものですが、これらの校則やルールは、「学校に行かない」決定的な要因としては機能していないのかもしれません。

こうして調査結果の傾向を分析していくと、「不登校群」の中学生は、いわゆる「不合理で不適切な」校則にはそれほど違和感を持っていないけれども、「みんな」が作り出している「空気」のようなものに違和感を持ちやすいという傾向が見えてきます。「不合理で不適切な」校則については、「統制群」「不登校群」ともにかなりの割合の中学生が疑問を持たずに受け入れてしまっています。

では私たちは、「ブラック校則」にどのように立ち向かえばいいのでしょうか。まずは、これらの「不合理で不適切な」校則に皆が違和感を持つことが、学校を誰にとっても居心地のよい場所にするための第一条件になりそうです。ただし、皆が違和感を持てば、こういった校則が変わっていくわけではありません。「統制群」と「不登校群」がともに「不合理で不適切な」校則に違和感を持ち、行動に移すことが必要になってきます。

つまり、①大多数が特定の校則やルール（または学校を取り巻いている空気）に違和感を持つこと、②「統制群」と「不登校群」の違和感の差を小さくすること、③校則やルールや空気を変えるための行動を起こそうとすること。この3つの条件が噛み合えば、きっと「不合理で不適切な」校則はいずれなくなっていくことでしょう。一見難しく思えるかもしれませんが、この3つの条件は歴史上何度もクリアされてきたものです。皆さんも自分が持っている違和感を大切にして、皆がよりましな学校生活を送れるよう方向性を考えてみてくれたら嬉しいです。

◇鈴木　翔（秋田大学 大学院理工学研究科 講師）

語る!!

学校の英語教育をめぐる雑感

1　はじめに

ＮＨＫラジオの「実践ビジネス英語」のテーマで、"Plastics, Plastics, Everywhere"（２０１９年７月）というものがありました。プラスティックゴミの問題を扱ったスキットですが、「プラスティック、プラスティック、どこにでも」とは一体どういう表現なのでしょうか？　実はこれはあるフレーズのパロディーなのです。元は「Water, water, everywhere」で、Samuel Taylor Coleridge（1772-1834）という英国のロマン派詩人の「The Rime of the Ancient Mariner（老水夫の歌）」の一節です。このフレーズはこのまま、洪水の記事の見出しに使われたり、ゴミ問題を伝えるニュースで「Garbage, garbage, everywhere」となったりして、比較的よく見られるものです。

もちろん、元の表現を知らなくても内容は理解できますが、タイトルや見出しなどで出会った時に、パロディーであることを知っておれば、より深く（そして面白く）理解できるのではないでしょうか。そのためには、英文学などについての知識が必要です。

2　英語教育のあり方

英語教育というと「コミュニケーション能力」とか「４技能のバランス」が常に語られます。このような議論は明治時代からありましたが、この基にあるのは、英語教育が「訳読と文法中心」であり生徒は「英語を読むことはできても、話すことができない」という現状認識であり、「英語が話せる」「英語でコミュニケーションが取れる」よう教育すべきだという課題意識です。さらにこの根底には「訳読と文法中心の受験英語」と「実用英語」という二種類の「英語」があって、後者を取るべきだという前提があります。

私はここには二つの問題があると思います。一つは、実用英語に文法や単語力は要らないのかということ、もう一つは、英語に関わる文化的背景を教えなくてもいいのかということです。もちろん両方ともそのようなことはありません。

3　学校で教えるべきこと

私は学校では「すぐには役に立たないこと」「学校外では学ぶのが難しいこと」を教えるべきであると考えます。英語について言えば、①体系的文法　②単語　③文化的背景、です。

文法については、私はかつてある大手の英会話学校の非常勤講師として、英検（２級・準１級）やTOEICの対策講座を担当していました。受講生の多くは社会人でしたが、テキストの中で、文法に関する部分の殆どが高校までで勉強するはずの内容であったことを覚えています。

"Will you ～?" よりも "Would you ～?" の方がより丁寧なのはどうしてか、suggest や insist などに続く節ではどうして動詞の（現在形ではなく）原形がくるのか、"It is time" に続く節の動詞はどうして過去形なのか？　これらは仮定法の知識がなければ理解できません。会話表現を理解するためにも、きちんとした文法学習が必要です。

単語については、とにかくできるだけ多くを覚えることが大切です。その際、紛らわしい単語（historic と historical、disinterested と uninterested、continuous と continual、respectful と respect-

able と respectful の違い）や用法（collocation など）についても知ることが必要です。さらには語源や歴史的背景なども単語理解には欠かせません（この点からすれば、英語教師には Oxford English Dictionary［OED］を使いこなせる技量が必要でしょう）。

そして文化的背景です。英語の引用句の3大出典は、The Bible と Shakespeare と nursery rhyme［Mother Goose］であると昔読んだことがあります。もちろん学校でこれらをすべて読むことはできませんが、現代の英語を理解するためには、このような「古典」を学ぶ必要があることを生徒に伝え、その上で引用句辞典などを使って、有名なフレーズに触れることだけでも効果はあると思います。

4　学校教育の役割とは

学校教育は良くも悪くも現実からは離れています。そのマイナス面ばかり強調されますが、生活や仕事のことを考えないで純粋に勉強に専念できる時間は貴重ではないでしょうか。私はそのような学校教育では「実用的ではないけれども、将来の学習の基盤を与える」ことが重要だと思います。英語については、多くの input をすることです。それは文法と単語です。これがなければ将来話したり書いたりという発信をすることはできません。

そして文化的背景についても、「何の役に立つか分からない知識」こそ教えるべきです。

なお1970年代の「英語教育論争」は、現在も考えるべき論点を多く含んでいると思いますが、私は渡部昇一の立場に強く共感します。

5　おわりに

学生時代の授業で、John Donne（1572-1631 Shakespeare と同時代人）の詩を読むものがありました。ひたすら先生が読んで説明するものでしたが、いろいろと発見がありました。例えば Hemingway の"For Whom the Bell Tolls"（『誰がために鐘は鳴る』）は、Donne の詩の一節から取られたことを知りました。また、"Death, Be Not Proud"（『死よ驕ることなかれ』）は、高校時代にこのタイトルの本を読んだことがありました。それは息子を脳腫瘍で亡くしたジャーナリストの本の翻訳でしたが、これも Donne からだと学びました。

当時も英語のリスニングやライティングの授業はありましたが、今思うと、この Donne の授業が最も「役に立った」と思っています。それは、この授業を取らなければ、Donne の名前を知り、その作品に接することはなかっただろうという意味で「役に立った」ということです。

国語でも文学教育が「縮小」されることへの批判があります（例えば『文学界』9月号の特集「文学なき国語教育」が危うい！」）。言語教育に限らず、浅薄な実用主義に走るのではなく、確実な知識と教養を深める教育こそが必要ではないでしょうか。

勤めていた英会話学校のハロウィーンパーティーで（1990 年代半ば）

【参考文献】
平泉 渉・渡部昇一『英語教育大論争』文春文庫、1995
久保田竜子『英語教育幻想』ちくま新書、2018

◇友野 清文（昭和女子大学 総合教育センター 教授）

語る!!

「謎のベストセラー」、教科書を問い直す

1. 教科書はお好き？

みなさんは学校の教科書がお好きでしたか？　多くの方は、小学校に入学してから高校を卒業するまでの12年間という長きにわたり、教科書とつき合い続けてきたはずです。重いカバンを背負って登下校していた日々が懐かしいものです。

正直なところ、私はあまり好きではありませんでした。教科書よりも、むしろ、資料集を好んでいたタイプの人間でした。今でも教科書を見ると「どうも味気ない」と素朴に感じることがあります。今回は、この教科書を子どもの側に立って問い直してみたいと思います。

2. 教科書とは？

学校教育において、教科書は「小学校、中学校、義務教育学校、高等学校、中等教育学校及びこれらに準ずる学校において、教育課程の構成に応じて組織排列された教科の主たる教材として、教授の用に供せられる児童又は生徒用図書であり、文部科学大臣の検定を経たもの又は文部科学省が著作の名義を有するもの」（教科書の発行に関する臨時措置法第二条）と定義づけられています。現行の「学習指導要領（検定教科書」体制のもと、教育の機会均等の原則を実質的な意味で担っているのは、教科書と言っても過言ではありません。学校生活のほとんどを教科学習が占めていることを考えれば、教科書の内容構成が子どもの人格形成に与える影響は非常に大きいです。

ここで、定義に含まれた文言に注目したいと思います。教科書は「主たる教材」であり、「教授の用に供せられる」図書だと書かれています。いずれも教師の側に立った文言です。教師はその「主たる教材」を中心に日々の授業を組み立て、子どもの学習経験を組織しようとします。ただ、穿った見方をすれば、教師による教授がなければ、子どもは教科書をもとにして各教科における学びの世界を深く味わえない作りになっていると言うこともできるのです。教科書が教師の教授活動を援助する機能を果たしているのは確かですが、教科書「自体」が教師の教授機能の一部を代行する機能も有していることに、もっと注意を向けるべきではないでしょうか？

3. 偏った「教科書問題」？

さて、みなさんに1冊の書籍をご紹介します。それは『教科書』（柴田義松 編：有斐閣、1983）です。副題には「子どもにとってよい教科書とは」とあります。この文献の「まえがき」に今でも検討に値することが書かれているのです。せっかくの機会ですので、引用します（前掲書、i - iii頁）。

> 教科書に関する教授学的研究は意外と乏しい。教科書研究は、わが国の教育学のなかでさほど重要な地位を占めてこなかった。…（略）…「教科書問題」といえば、わが国では検定制度の問題とすぐとられてしまう。たしかに、この制度を改めていくことも大切だが、もっと大切なのは、教科書の中身を子どもにとって魅力のある、わかりやすいものにすることであろう。実際に、世論調査を見ても、大方の国民が切実な関心を寄せているのは、教科書のイデオロギー偏向とか検定のことよりも、「内容」が難しいということで

あり、それをなんとかしてほしいということなのである。

いかがでしょうか？　私にとっては、とてもインパクトのある指摘でした。子どもたちの目に教科書はどう映っているのか、そこにどこまでの魅力を感じているのか、改めて考え直す必要がありそうです。

4．もしかして「謎のベストセラー」？

教科書の基本的な機能には「①子どもにとって価値ある真実の情報を選択し、伝達する機能＝教科書本文（図解）」「②子どもが自分の知識を構造化し、体系化するのを助ける構造化機能＝章節の構成」「③子どもに学び方（研究方法）を学ばせる学習法機能＝質問・問題」があると言われています（前掲書）。確かにその通りなのですが、私はあえてその前段階に目を移したいと思います。つまり、「そもそも教科書を手に取って、読んでみたいと思ってもらえるか？」ということです。

今や出版不況の時代です。書籍や雑誌が売れないなか、出版社は少しでも売れるよう、様々な企業努力を積み重ねています。ちなみに一般書籍の場合、近年では10万部以上売れたらベストセラーと言われます。その現状を教科書出版の現状と照らし合わせた場合、教科書一点あたりの需要数（表1）は、小学校・中学校の場合、20万部を超えています。高等学校が少ないのは選択できる科目がたくさんあるためです。一般書籍と比べ、確かに定価は安いですが（表2）、たとえ少子化とは言え、かなり安定した市場があるのも確かです。

ここでみなさんにお聞きします。もし教科書が書店で平積みにして売られていたら、それを手に取り、購入しようと思いますか？　肝心の子どもたちは買ってほしいとねだるでしょうか？　複合教材である教科書は、それ自体が子どもを学習に向かわせようとする機能を果たします。スタートラインからして、どうも出遅れている気がするのです。

表 1　教科書の種類数・点数・需要数（平成 30 年度用）

	種類数（種）	点数（点）	需要数（冊）	一点あたりの需要数（冊）
小学校用教科書	56	319	68,710,556	215,394
中学校用教科書	66	129	32,092,860	248,782
高等学校用教科書	815	853	30,885,094	36,208
うち、必履修教科・科目	263	273	17,455,976	63,941

*1：数値は「教科書の種類数・点数・需要数（平成 30 年度用）」より
*2：高等学校用教科書については学習指導要領（平成 21 年文部科学省告示第 34 号）に基づく
*3：高等学校用教科書の必履修教科・科目の「一点あたりの需要数（冊）」は四捨五入した数値

表 2　教科書 1 点当たりの平均定価（平成 30 年度用）

区分	小学校用	中学校用	高等学校用
金額	378	547	808

* 文部科学省「教科書制度の概要」（平成 30 年 6 月）より

5．「真の」エンドユーザーは誰か？

そんなことは本質的ではないとお叱りを受けそうですが、イマドキの子どもたちは、デジタルネイティブとして生まれ育ってきた世代です。彼ら／彼女らの身のまわりには刺激的な情報が満ち溢れています。教科書は学校で使わざるを得ないメディアに過ぎません。具体的な説明もなく事実の羅列に終始しがちな教科書には、子どもの心を揺する物語（ストーリー）が欠けています。

もちろん、教科書会社が学習指導要領や教科用図書検定基準、学校現場の都合、必要経費等、様々な制約があるなか、創意工夫され、努力されてきたことには敬意を表します。とはいえ、「教師に採択してもらえる教科書ではなく、子どもに選んでもらえる教科書へ」、「教授の用に供せられる教科書から、探究の用に供する教科書へ」と転換することが必要不可欠だと私は考えます。探究するに値し、子どもを学びの冒険へと誘う魅力的な内容構成を吟味するとともに、その見せ方・描き方に関わるデザインにも、もっと目を配るべきです。

カッコよく、オシャレで、おもしろい！　しかも、ためになる！　そうした個性的な教科書の登場に期待しつつ、私自身、何らかのカタチで一石を投じたいと目論見中です。

◇緩利 誠（昭和女子大学 総合教育センター 准教授）

語る!!

七夕読書会をめぐる冒険
～一通の手紙から～

あれは、8月8日。模擬授業づくりに学生と格闘していたとき、届いた一通のエアメール。

「さっちゃん～ごきげんよう。七海です。何度かメールしたのですが、うまく届かなかったので手紙にしました。今私はニューヨークで物流の仕事をしています。外大に在学中、約束した通り「記憶」「物語」を学ぶため留学、そして卒業後三井物産に入り、7月からニューヨーク勤務です。7月7日、七夕、必ず思い出すのが、あの七夕読書会。よしもとばななの「ムーンライト・シャドウ」はニューヨークにも持ってきました。あの日から、私は人にとって、記憶、そして、物語とはなんなのか考え続けています……」

かつて高校教師だった私の最後の教え子からの手紙は、あの「七夕読書会」を鮮やかに蘇らせます。3・11大地震が発生した、あの年の7月7日。

◇

不安いっぱいでスタートした高校3年4月始業式「一年間一緒に学ぶ仲間たちと、一緒に何かを続けるプロジェクトってどう?」と私が語り始めると、生徒達から猛烈な拍手。それを受け「私の話を聞いてください」プロジェクトを話し始めると「おもしろそう～」「やりた～い」の声があがります。これは朝のホームルームを使い、毎日一人が「私の話を聞いてください」と、今、私が興味関心を抱いている社会のコトを仲間に説明し、その中で自分の思い・考えを語るもので、素材は新聞・ネット・雑誌なんでもOK、紹介した素材は週の終わりに一枚のプリントにして配布し、各自じっくり読み込むというシンプルな試みです。拍手をうけ「では、今日は私からやらせていただきます」と開始「私の話を聞いてください。今日、私が皆さんに紹介したいのは、今朝のこの新聞の記事です。」と藤原信也さんのエッセーを紹介。『先日、主宰するウェブマガジンに、ルターの「たとえ明日世界が滅びようと、わたしは今日林檎の木を植える」という言葉を掲載した。「読んで涙をぼろぼろこぼした。仲間と『こういう世の中だけど、前向きに生きていこう』と話し合った」というメールが来た。過剰反応かなと思ったが、肩書を見てハッとした。フクシマの高校生からだった。』

ここから始まった「私の話を聞いてください」で、生徒達は一生懸命他者の発言を聴くことで、自己と他者の差異に気づき、自己の考えを深めたり、広げたりする学びの楽しさに魅了されていったのです。そんなある日「先生、今度みんなで読書会したいです。一つの小説を真ん中において、みんなで語り合いたいです」というリクエストが出てきたのです。その声に応え、7月7日期末考査答案返却日の午後、34名有志による、よしもとばななの「ムーンライト・シャドウ」をめぐる「七夕読書会」が開催されたのでした。

七夕読書会「ムーンライト・シャドウ」で生徒達が選んだ作品は、よしもとばなな作「ムーンライト・シャドウ」。これは、高校二年の授業で、よしもとばなな「バブーシュカ」を読んで以来、彼女のファンが増えていたこと、3・11以来、死をめぐる語りに対してどうしても敏感にならざるをえない状況の中、喪失感をいかに乗り越えていくかを生徒たち自

身がたえず考え続けていることからの選択だったと言います。「恋人等を亡くした、さつきと、等の弟で、同じく恋人ゆみこを亡くした柊、そこに登場する謎の少女うららら。」この人物たちの繰り広げる物語を選んだ読書会中心メンバーたちは皆にこう呼びかけます。「大切なことは3つだけ」

・一人で考えるよりも、みんなで考えるほうが楽しい。

・一人で考えるよりも、みんなで考えるほうがステキなアイディアが生まれる。

・一人で考えるよりも、みんなで考えるほうが、大きくジャンプできる。

そして、読書会のデザインをステキなレジュメを配布しながら、紹介します。

①みんなで感想を交換しあう。

②話し合いたいテーマを焦点化してディスカッションを行なう。

③ホット・シーティングを行なう。（登場人物の心情を追体験する）

④キャッチ・コピーを作る。

⑤読書会の感想を交換する。

読書会一番のハイライトは、皆で作った「問い」&ディスカッション。

5つの問いとは

①柊はなぜセーラー服を着続けるのか？

②うららとは何者か？

③さつきとは一体どんな少女か？

④水筒のこの小説における意味は？

⑤さつき・うらら・柊・等・ゆみこ名前の意味するものは？

七海さんは手紙の中で、あのときの印象的な発言に言及しています。「セーラー服って戦闘服と思う、等が自分の壊れそうな思いを支え保持していくための手段とゴイちゃんが言った時、死を受容することのできない哀しみという方向で収束しつつあった空気が、ぱーんと新たな方向にひろがりみんなが『おおーっ』と叫びましたよね」「うららはさつきの分身、喪失の哀しみから立ち上がり、前進していこうとするさつきのなかに生まれたもう一人の私、メイちゃん発言は私の中にあった思いをはっきりと言葉にしてくれました」「さつきはフツウの少女、大好きな恋人を失くし死ぬほど哀しみにくれる、このフツウさが重要、フツウであるから、共感を覚えることが可能、でも、フツウにふるまうことってエネルギーがいるんだってこと、みんなが同じことを考えていてびっくり」「ジョギングという哀しみを忘れるための儀式の中で、熱いお茶はさつきを日常次元に帰してくれるもの、ユウキの発言にびっくりしました。水筒は深いものだった、はじめて気づきました」「うららは春、哀しみの冬を過ぎ春を迎える意味、さつきは、「うららは」の春を過ぎ哀しみを乗り越え再生する初夏を、柊はクリスマス「冬」と考えると、生きている3名は、冬を過ぎ、春を向かえ、初夏に至る、まさに、時の流れを表すのに対して、季節の無い世界で生きる二人が「等」「ゆみこ」であることの意味は大きい、みんなの意見を聞きながら鳥肌がたちました」

七海さんの手紙は次の言葉で終わります。「あの七夕読書会は単なるイベントではなく、新たな学びの《冒険》でした。」そして、今、私もはっきりと思い出すのです。あのとき、みんなで考えた「七夕読書会」のキャッチコピーのことを。

「ドラマで夢を見よう、そして、ドキュメンタリーで目覚めよう」

「遠きあの日」の記憶を想起させてくれた一通の手紙

◇青木幸子（昭和女子大学 総合教育センター 准教授）

探學訪校

〔今回の学校〕

山脇学園中学校・高等学校（東京都）

1903年、山脇玄・山脇房子夫妻によって創立された、116年の歴史を誇る伝統校である。日本で最初に洋装の制服を考案・採用した学校としても知られる。建学の精神に「高い教養とマナーを身につけた女性の育成」を掲げ、近年では「山脇ルネサンス」と称するオリジナリティ溢れる学校変革に挑戦し、これからの時代にふさわしい学びを探究し続けている。

ちょうど100年前の1919年、日本憲政史上はじめて、帝国議会で「婦人参政権付与」の演説を行った人物こそが、山脇学園中学校・高等学校（以下、山脇学園）の創立者・山脇玄でした。妻の初代校長・山脇房子もまた、「大日本婦人教育会」の中心的な人物の一人であり、山脇夫妻の生涯はまさに「女子教育の充実」と「女性の社会的地位の向上」に捧げられたものでした。今号では、116年にも及ぶ伝統を受け継ぎ、建学の精神の現代化を図りながら押し進められてきた学校変革「山脇ルネサンス」を中心にして、女子教育の可能性を探りたいと思います。

1　山脇学園のDNAとは？

初代校長の山脇房子が掲げた建学の精神は「西洋人女性に負けない高い教養とマナーを身につけた日本女性の育成」でした。その背景には、彼女自身が父親から「これからの時代は、女でも学問さえあればどんなにでも偉い人間になって活躍できる」と諭されながら育った経験、英語を独学で身につけ一流の女流学者と評価されるまでに至った志の高さ、そして、高い教養と品格のある立ち居振る舞いを兼ねそろえた西洋人女性との交流による刺激などがあったようです。それは「良妻賢母であれ」という規範を乗り越える女子教育への挑戦と言うことができます。

この教養教育と人間教育を二本柱とする建学の精神は今も受け継がれています。私学の礎は建学の精神なわけですが、実際のところ、形骸化してしまっているケースも多々あります。そのなかでも、山脇学園は建学の精神の現代化を図ることで、長きにわたる伝統を受け継ぎつつ、これからの時代に向けた革新に挑もうとしています。今では、建学の精神を土台にし、現代社会で生き生きと活躍するために必要な4つの力が教育目標として体系化されています。多様な価値観が共存する現代社会に貢献するための①「自己知」（自分を知る力）と「社会知」（社会を知る力）、②変化の激しい現代社会で女性が活躍するための「創造的学力」、③常に新しい情報を集めて自己変革を繰り返していく「自己啓発力」、④多様な人とつながって働く力「協働力」です。

こうした力を中高一貫教育で育む、そのための新たな仕組み・仕掛けづくりこそが、後述する学校変革「山脇ルネサンス」になります。現校長・山﨑元男氏は「基本は何も変わらない、社会でイキイキと活躍できる女性のリーダーを育成することが使命だ」と語ります。都心の一等地に構える校舎での学校生活でも決してすれることなく「素直で明るく、まじめで何事にも一生懸命に取り組む」生徒たち。その生徒たちに「愛情」をもって向き合い、自分たちの仕事に「愛情」をもち、卒業するまで手塩にかけて育てようとする教師たち。山脇学園の校章にはハートマークの内側に富士山が描かれています。この校章に込められた想い、すなわち、ハートマークに象徴される温かい心の中に凛とした志をもった女性に「私たち」はなる！　そんな女性を「私たち」は育てるんだ！　そうしたチャレンジスピリッツで結ばれた教育的関係性にこそ、山脇学園のDNAは宿っています。

2　学校変革「山脇ルネサンス」への挑戦

(1)「山脇ルネサンス」のきっかけ

山脇学園は2008年に大きな転機を迎えました。それは「短期大学募集停止」です。それまでの山脇学園中学校・高等学校の教育は、「ややもすれば短期大学に入れる教育が主流であった」と現校長は言います。それゆえに、短期大学の閉校は、中学校・高等学校が単独で自立した教育をしていかなければならないということを意味します。従来の教育を進化させる、新しい学園づくりに向けた挑戦の始まりです。全国的に女子教育自体が厳しい状況に置かれるなか、その成否は学園の存続をかけたものになります。

そこで新たに構想され、実行に移されたのが「山脇ルネサンス」と称する学校変革でした。2009年が記念すべき始動の年になります。「再生」や「復興」を意味するフランス語のルネサンスという言葉を用いたところに、山脇学園の原点に回帰して新たに出発しようとする決意、そして、人間性の解放や個性の尊重を主張し、近代ヨーロッパ文化の基礎を確立したとされる、かつての文化革新運動に匹敵する挑戦を成し遂げようとする覚悟が窺えます。

(2)「山脇ルネサンス」のオリジナリティ

「山脇ルネサンス」の最大のオリジナリティは「カリキュラムと教育施設の一体的改革」にあります。短期大学が使っていた諸施設の有効利用も考える必要があったため、それらを中学校・高等学校に統合し、「最高水準の教育の実現と最高品質の教育施設の整備」を一体的に目指すことになったのです。2011年から大規模なリニューアル工事が始まり、独自の施設が次々と作られていきました。その代表的な施設が「イングリッシュアイランド」「サイエンスアイランド」「リベラルアーツアイランド」です。いずれも、山脇学園が重要視した国際教育、理科教育、教養教育の充実と対応しています。そこでは総合的な学習の時間・探究の時間とは別に、教科書に依拠した通常の教科学習を越えた、より発展的な学びの機会が提供されます。例えばイングリッシュアイランドにはテーマパークに来たのかと錯覚するほどの教室環境が、サイエンスアイランドには様々な機器が揃った研究室のような実験環境が、リベラルアーツアイランドにはアクティブラーニング仕様の什器で構成された学習環境が、それぞれ整備されているのです。

その他にも、生徒たちが自学自習するための「自学館」、放課後の補習やクラブ活動、科学的探究活動のための「放課後活動棟」、生徒たちの健康を支える「カフェテリア」も開設されました。校内には畑や田んぼ、ビオトープもあります。都心の一等地で、限られた敷地面積にもかかわらず、これだけの施設が揃っている学校は、管見の限りですが、類を見ません。

3　「真正な学び」を求めて

たとえ充実した施設があったとしても、施設はあくまでも「箱もの」であり、それを使いこなすことで初めてその真価を発揮します。当初は「箱ものじゃないか」という人もいたようですが、そうした声を乗り越える教師の努力が実を結び始めます。各アイランドにおける学びの特徴は「何かになりきって学ぶ」と言い表すことができます。より本物に近い実際的・実践的な学び、すなわち、「真正な学び」が繰り広げられているのです。

入学後、中学1年生の時から各アイランドを活用した学びが始まります。例えば、イングリッシュアイランドでは、週1回の「イングリッシュアイランドステイ」という時間が設けられています。イギリスをイメージしたお店が立ち並ぶオープンな教室で、生徒たちは銀行や薬局などのブースでロールプレイしながら実際的なコミュニケーションを学びます。公用語は英語のみです。「間違えてもいい、とにかく話そう」をスローガンにして、常駐するネイティブの先生方が中心になって、楽しく英語を学ぶ工夫を仕込んでいきます。

サイエンスアイランドにおいても発想は同じです。週1回の「サイエンティストの時間」があり、実験中心の授業が組まれています。2年間で約50種類の実験を経験するようです。単位の使い方や四捨五入の仕方、データ処理の方法、実験レポートの書き方など、基礎・基本から丁寧にステップを踏みながら学んでいきます。校内のビオトープで採集したプランクトンの観察やスケッチなども行われており、各種施設を活用する工夫も施されています。科学者が科学するように学ぶ、その経験を蓄積していくことで「科学とはどういう営みなのか」を、身をもって体感できるようになっているわけです。

また、リベラルアーツアイランドでは、週1回、「知の技法」と呼ばれる時間が設定されています。

国語科と社会科の教員が中心となって、「脳死は死と認められるか」など答えが一様に定まらない問いをめぐり、ディスカッションやプレゼンテーションに取り組む機会が設けられています。分野横断的な学びも試みられており、例えばサイエンスアイランドでDNAの抽出を学び、それとリンクさせて「それが倫理的にどこまで許されるのか」を議論することもあるようです。社会の現実に目を向け、様々な見方や考え方があることをまずは学び、その多様性を踏まえながら、自分の考えを確立することを生徒たちは学び取っていきます。

こうした中学生1・2年の学びをもとに、より本格的に学びたい生徒たちのために、英語チャレンジクラス（2クラス）と科学研究チャレンジクラス（1クラス）が中学3年で設けられています。いずれも希望選択制です。前者ではネイティブの教師が副担任につき、朝礼や終礼も英語で行われ、英語関係の授業も多く配置されています。語学研修にも出向きます。後者では、野外調査研修に出向いたり、大学の支援も受けながら年間を通じた課題継続研究に取り組んだりしています。

この中学3年生の経験は自分の適性を判断する機会になっており、高校1年では全てのクラスがスタンダードクラスに戻ります。1年間、本格的にやってみて、自分には向いていないと思い、キャリアの方向性を変える生徒もいるようです。「それが大事だ」と山脇学園の先生方は語ります。より本物に近い経験をたくさん積みながら、自分が進みたい道を自らが選択する、志を確立するための仕組みが構築されていると言うことができます。

4　取材後記

取材を通じて、最も印象に残ったのは「体験の場を与えると生徒は変わる」ということです。しかも、より本物らしさを追究する体験の場が、教師の努力によって意識的に設けられており、そこには何かになりきって学ぶ仕掛けがたくさん施されています。実際に経験して自分で判断することの重要性が、随所で強調されています。あわせて、「山脇ルネサンス」によって開設された諸施設は、その本物らしさを演出する機能をしっかりと果たしています。

「山脇ルネサンス」の効果は、すでに目に見える形で現れてきています。海外大学の進学セミナーやTOEFL対策講座などを開催すると100名以上の参加者・希望者が集まります。一年留学やターム留学を希望する生徒も増えてきています。自分のキャリアにおいて英語を活かしたいという生徒が増えてきていることの証左と言えるでしょう。また、理系分野に進学する生徒数も2018年度（2019年3月卒業）は34%を記録しており、非常に高い値になっています。学校がチームとなり、仕組みをつくり、仕掛けをつくる、そうした努力の成果が結果にもつながってきます。

「山脇ルネサンス」の立ち上げから考えれば「よくぞここまで」、他方で、未来を見据えれば「まだ道半ば」、山脇学園の先生はそう現状を評価します。大学進学後、さらには社会に出てからの生徒たちの活躍も見取りながら、さらなる挑戦をしていきたい。現校長・山﨑先生のリーダーシップのもと、山脇学園の挑戦は続きます。

〔学校長 山﨑元男先生に伺いました〕

「この時代における女子教育の意義、そして、可能性とはどのようなものでしょうか？」

別学の良さは男女差による固定観念に縛られないところにあります。

東京都内の私立校のうち35%は女子校が占めているわけですが、現在、女子教育は非常に厳しい状況に置かれています。とはいえ、今こそ改めて別学のよさを考えたいと私は思っています。日本で女子校が多く創立された時期は3つあります。明治維新後、第一次世界大戦後、関東大震災後です。いずれも、社会が困難な時だからこそ、女子の教育をしっかりやろうという考えがあったのだと考えています。実は今もそうではないでしょうか？厳しい時代だからこそ、女子教育の価値を改めて見つめ直す必要があると思うのです。

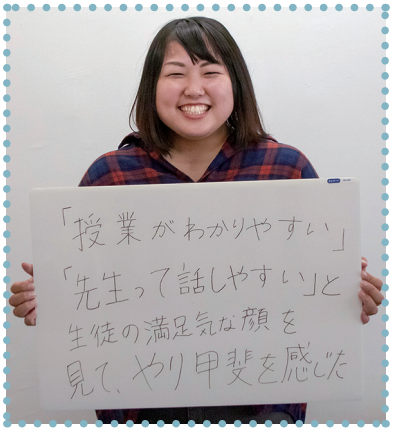
共学は社会の縮図だから共学で学ばせた方が良いという議論があります。でも、社会そのものが歪んでいれば、共学校そのものも歪んでくる。女子が活躍できない社会があり、その縮図が共学校なのだとすれば、そこで展開される教育のあり方そのものが歪んでいることになります。別学のよさは男女差による固定観念に縛られないところにあります。例えば、男子だから理系が得意、女子だから文系が得意というのは単なる思い込みです。また、思春期を迎える時期も男女でやはり異なります。世間一般に根強くある固定観念に縛られることなく、かつ、異性の目を気にすることなく、自分たちが進みたい道に向かって、何事にもひたすら打ち込むことができる、それこそが女子校のよさです。そして、そうした経験を思春期からしっかりと積み上げていくことが、確かな教養に裏づけられた「志」の確立につながる、私はそう信じています。

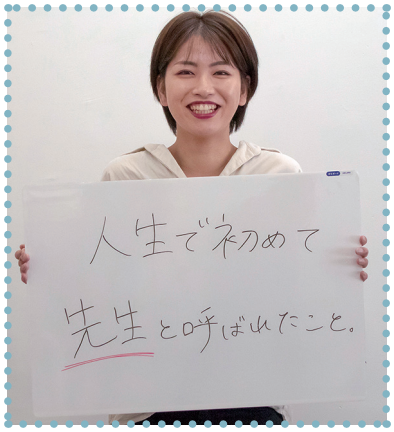
◇緩利 誠（昭和女子大学 総合教育センター 准教授）

イマドキ学生に聞きました
一生忘れない! 教育実習で得た最高の経験は?

教育実習を終えたばかりの4年生に、「教育実習で得た最高の経験」を聞いてみました。みなさん、教育実習ならではの経験を挙げてくれました。きっとこれからの人生の中でも忘れられない、いつまでも鮮やかな思い出になると思います。

この経験を糧に、これからも沢山の素敵な経験を積み重ねていってくださいね!





先輩はもがく、されど進む

平成 31 年 4 月から教壇に立たれている卒業生に近況報告やメッセージをいただきました。

私立　中学校・高等学校

飯田　杏さん（社会科）

今年の 3 月、2 年生の担任を持つと知らされたとき、とてつもなく不安でした。何も分からない状態でバタバタと始業式、授業開始、体育祭、海外へ修学旅行にも行き、たくさんの失敗経験をしました。「なぜこんな大変な仕事を選んでしまったんだろう」と落ち込む日々、先輩の先生方に助けてもらいながらこなしてきました。人に恵まれた、幸せな職場です。おかげで楽しくやっていますが、常に仕事に追われる疲労感と、思うような授業ができないことに対する焦りも感じています。

そんな私が今できることは、とにかく勉強することだと思っています。大学時代の授業資料には何度も助けられました。勤務中はもちろん、休日もできるだけ研修の機会を持つようにしていますし、どんなことも自分の教養として吸収できるように意識しています。

それから、失敗したときに反省しすぎないようにしました。無責任に聞こえるかもしれませんが、精一杯準備してだめだったことを後悔して引きずるより、「次回頑張ればいいや」と切り替えることが自分のためになります。

大学生の頃には想像しなかったような毎日です。正直、私の理想の教員像と現状はかなり違うし、「向いてないなぁ」と思うことも多いです。しかしまだ 1 年目。自分らしく、一生懸命続けた先に成果があると信じています。とにかく勉強して、失敗しても落ち込まない。少しでもみなさんの参考になればと思います。

私立　中学校・高等学校

白石　紗彩さん（英語科）

皆さんは教員という仕事についてどのようなイメージを持っていますか。

私は大学入学時から子供の成長を育む環境で働きたいという想いがあり、教育に携わる仕事に就きたいと考えていました。大学 4 年次に教育実習で教員の大変さを経験し、1 度は教員になる夢を諦めましたが、今では諦めずに決心して良かったと思います。

現在は高校 1 年生の副担任、教科指導、部活顧問を通して生徒と関わっています。日々、想定外の出来事が起こるため、試行錯誤を繰り返しながら過ごしていますが、その分仕事の達成感や喜びを感じる場面に多く出会えたり、時には生徒の成長を間近で見ることが出来ることも教員の特権であると感じています。

教員として働くということは、生徒にとってお手本となる人物としていなければならないと思い悩んだ日もありました。ただ、自分らしく接することが生徒の心に 1 番寄り添って関わることができるという自分なりの答えに辿り着きました。ぜひ今後子供と関わる仕事を考えている方は気負わずありのままで接してみて下さい。

教員や教育関係の仕事を目指している方は、「卒業時にどのような生徒になって欲しいか」「何を生徒に伝えたいか」「何を経験して欲しいか」を時間を作ってじっくり考えてみることをお勧めします。

大学時代は色々な職種の方と会って話を聞いたり、悩んで下さい。夢を諦めずに追いかけ続けた人にだけ見られる世界がきっとあります！ぜひ自分に向いている仕事ができるよう応援しています！

私立　高等学校

高杉　留美さん（国語科）

「実習生みたいな授業だね」私が 4 月に入り先生方の前で模擬授業をした後に、ベテラン先生に言われた一言です。それから約半年間、私はその言葉と戦ってきました。

『実習生みたいな授業』は、良くないのか？　まるでベテランのように授業が出来ればいいのか？　いや、実習生の時の気持ちは忘れたくない……。思ったような授業ができない日々が続きました。というよりも、自分がしたい授業がよくわかりませんでした。とにかく一生懸命に授業をすることで精一杯でした。クラスの半分が授業中に眠ってしまった日の帰り道は、教師という職業に就いていない自分を想像してしまいました。

しかし、その日々に変化が出たのは、9 月のことでした。1 年生の女子生徒が、授業終わりの私を追いかけてきて、「先生。私、先生の授業が好きだから、私が卒業するまで辞めないでね。」と言ってきたのです。その時、私はようやく先生になれた気がしました。

今は、何かが吹っ切れたように、授業をしています。日々の授業で、なるべく生徒が楽しめるように工夫をする努力をしています。大変なことは多いですが、先生を辞めたいとは思いません。むしろ、大学生の時の「先生になりたい」という気持ちを思い出して、「先生になって良かった」と心から思っています。

今、教師を目指している皆さんに私から言えることは、「先生になりたい」と思ったはじめの気持ちを大切にしてほしい、ということです。

公立　中学校

増渕　茜さん（家庭科）

私は今、公立の中学校に勤めています。1 度目の採用試験には合格できず、少し遠回りをしましたが、やっとスタートラインに立つことができました。

着任までは、夢が叶った嬉しさ反面、本当に私に務まるのかと不安で眠れないこともありました。しかし今は、1 日 1 日がものすごいスピードで過ぎて行きます。出来なくても、分からなくてもやるしかないという感じです。もちろん、悩むこともあれば、失敗して落ち込むこともあります。しかしそれらを吹き飛ばしてくれるような充実感や喜びもたくさんあります。

教員 1 年目の私が皆さんにアドバイス出来る様なことはまだありません。しかし、強いて言うならば、「人に頼る術」を身につけて欲しいなと思います。「最初は、分からないことも失敗することも当たり前」先輩方がかけてくれたこの言葉に何度も救われました。大切なのはその時に素直に誰かに頼り学ぼうとすることだと思います。学校はチームです。現場には道を示してくれる素敵な先輩がたくさんいます。生徒から学ぶことも多々あります。私は良いチームに恵まれ、沢山の人に助けてもらいながら毎日走り続けています。

もし今、教師という道に踏み出せずに悩んでいたり、夢を諦めかけていたり、不安に思っているならば、まずは大学の先生を頼ってみてください。今の私があるのは、間違いなくそれができたからです。応援しています！

教職に就いた卒業生、その後の歩みに想いを馳せる

私が本学に赴任したのは 2009 年 10 月でした。それから 10 年間、教職課程を履修する多くの学生と出会ってきました。そして毎年何人かが教師になっていきました。

2009 年 4 月の入学生が、4 年間を通して接した最初の学年になります。来年で 30 歳を迎えますが、今でも定期的に会っている人が 3 人います。いずれも私立学校の教員を続けています。各々人生でいろいろなことがありましたが、教師として着実に成長しているのを見るのは、本当に嬉しいことです。

教師になった卒業生の多くが「学生時代に考えていた教師の姿と実際は全然違う」と言います。採用試験の論作文に書くようにはいかない訳です。これを聞くと、「大学で学校現場のことを伝えられていないのでは」と内心忸怩たる思いもあります。それでもほとんどの人は、現場で様々に迷い悩みながらも、多くを学び、自分を見つめ、教師としての歩みを続けています。教師は大変だけれど、やりがいや達成感のある仕事だと実感していると、私は確信しています。

私たちはそのような卒業生の「母港」になりたいと思っています。世間の荒波に疲れたらいつでも戻って来てくれることを期待しています。また教職に就いている卒業生のネットワーク作りが年来の課題です。卒業生同士、卒業生と在学生との情報・意見交換ができる場を何らかの形で作っていきたいと考えています。（友野 清文 教授）

昭和女子大学現代教育研究所
Institute of Modern Education
Showa Women's University

現代の教育課題の探求と本学園の存立理念の確認という

二つのテーマを柱とした研究所です。

現代教育研究所は、現代の教育課題の探求と本学園の存立理念の確認を目的とした研究所です。総合学園として学内のネットワークを構築するとともに、学外の研究者、教育関係者はもとより、様々な教育機関や研究機関と広く連携を図り、研究成果や提言の発信を行っていきます。

時代の流れ人敏感でありつつ、それに流されることなく教育について自由闊達に議論考察を行い発信する拠点としたいと考えます。

WEBSITE：http://iome.jp/　**MAIL**：kyoikuken@swu.ac.jp

昭和女子大学教職課程研究報
EduMate
vol.4

■編集■
EduMate 編集部

■発行■
昭和女子大学現代教育研究所

■発行日■
2019 年 12 月 25 日